シェイクスピアの新語，新語義をめぐる別な問題

英米文学教室　岡　村　俊　明

『恋の骨折り損』(*Love's Labour's Lost*) は，劇作品のなかでは韻文がしめる割合が最も多い（この作品の中の40％以上)。シェイクスピアが詩の創作を通過しなければ，書けなかった作品といってよい。シェイクスピアが詩のなかで練り上げようとしたことばが存分に見られ，特に，新語，新語義が最も多い作品である。そして面白いことに，新語，新語義のマイナス面も見せている作品でもある。この作品は，良い意味でも悪い意味でも，ことばの実験の場といえよう。

その作品に登場するアーマードー（Armado）は，「世界中の新しい流行を身につけ，頭の中には，新しいことばの鋳造所を持っている」(A man in all the world's new fashion planted, ／That hath a mint of phrases in his brain. 1.1.161-2) 男である。彼は肯定的に書かれている人物では必ずしもないが，ここがシェイクスピアのしたたかなところで，彼の一面は，新しい流行を取り入れ，新語，新語義にたいする好みを強く持っていたシェイクスピアである，ということもできよう。

アーマードーは，「午後」というべきを，'in the posteriors of this day'（本日の後半期）(5.1.94)，口髭のことを 'my excrement'（わしの外に生えているもの）(5.1.109)，子どものことを 'my tender juvenal'（わしのやさしい児童よ）(1.2.8)，「急いで」(quickly) というべきを 'bring him festinately hither'（彼を早急にここにつれてこい）(3.1.6) という。後の二つは新語であり，前の二つは新語義である。これらはどれも，難解で新奇なことばであろう。これまで，シェイクスピアの新語，新語義が持っているプラス・イメージとしての特性を論じてきたが，それだけではすまない問題を提供するだろう。

私たちは，新語，新語義をめぐって，これまでとは違った，別な問題を考えざるをえないだろう。

アーマードーに劣らず，この種の新語，新語義をむやみに使う他の登場人物は，学校教師ホロファニーズ（Holofernes）である。

> You find not the apostrophes, and so miss the accent. Let me supervise the canzonet. Here are only numbers ratified, but for the elegancy, facility, and golden cadence of poesy-caret. Ovidius Naso was the man. And why indeed Naso but for smelling out the odoriferous flowers of fancy, the jerks of invention? Imitari is nothing. So doth the hound his master, the ape his keeper, the tired horse his rider. But, damosella virgin, was this directed to you? (*LLL* 4.2.120-28)
> あなたは省略符号を読まないから，アクセントを読み落とすんです。その小唄を点検させてください。韻律だけは規則にかなっている。だが，高雅さ，流暢さ，詩の黄金の格調となると，キャレット—欠如しておる。その点では，オーヴィドの右にくるものはいなかった。そうだ。

ただ，空想のかんばしい花をかぎだしたり，想像のひらめきがないだけだ。イミタリ—模倣—はくだらん。猟犬が主人に，猿が飼い主に，くたびれた馬が乗り手にだってする。しかし，乙女子よ，これはお前宛にきたものか。

彼は，学識を誇示するためにラテン語 'caret'（欠如する），'imitari'（模倣する）を使いながら，新語 'apostrophe'（省略符号），'supervise'（点検する）を作り，新語義 'accent'（詩行中の強勢），'facility'（流暢さ），'jerks'（ひらめき），'direct'（～宛に書く）をも使っている。

難解なことばで人を煙に巻くのは，なにもアーマードーやホロファニーズばかりでなく，ナバール王（King of Navarre）も例外ではない。

This child of fancy, that Armada hight,
　For interim to our studies shall relate
In high-born words the worth of many a knight
　From tawny Spain lost in the world's debate.（*LLL* 1. 1. 168-71）
アーマードーという奇矯な男が，
　私たちの勉強の余興に，世界の大戦で死んだ，
浅黒いスペインのナイトの手柄話を，
　ごたいそうなことばで，話してくれることだろう。

王は，'hight'（～と称する）という古風な使い方を織りまぜて，'high-born'（高貴な生まれの）なる新語を作り，'fancy'（奇異）と'interim'（休憩時間）という新語義を使っている。「ことばの鋳造所」であるアーマードーを廷臣に紹介しながら，新奇なことばを使うことにおいて，彼に負けていない，といえよう。

このほかに，ナバール王に仕える三人の貴族ビローン（Biron），ロンガビル（Longueville），デュメーン（Dumaine）も，新奇なことばを使う。これに対するに，フランス王女，彼女の三人の侍女ロザライン（Rosaline），キャサリン（Katherine），マライア（Maria），そして王女に仕える貴族ボイエット（Boyet）も，同様に，新奇な，人を煙に巻くことばを多用する。

『恋の骨折り損』は，まさにこの意味で，「ことばの大宴会」の作品である。新語，新語義をプラス・イメージでばかり捉えてはいけないことを考えさせる作品でもある。その際に，私たちが特に考えるべきは，やはり，アーマードーとホロファニーズであろうが，新奇なことばを使う彼ら二人に関するモスとコスタードの傍白に注目しよう。

Moth（aside to Costard）They have been at a great feast of languages and stolen the scraps.
Costard（aside to Moth）O, they have lived long on the alms-basket of words. I marvel thy master hath not eaten thee for a word, for thou art not so long by the head as honorificabilitudinitatibus. Thou art easier swallowed than a flapdragon.（*LLL* 5. 1. 36-42）
モス［傍白］あの人たちは，ことばの大宴会に出て，食べ残しを盗んできたんだろう。
コスタード［傍白］そうだよ。あの人たちは，施しかごにはいったことばの食べ残しをずっと食べつづけてきたんだ。それにしても，おまえの主人が，字と間違えて，おまえを食べなかったもんだな。おまえは，honorificabilitudinitatibus という字ほどの背丈もないからな。おまえ

は火のなかの干しぶどうより，のみやすいだろう。

シェイクスピアの使った最長語 'honorificabilitudinitatibus'（27字からなる）を織りまぜたモスとコスタードのコメントは，アーマードーとホロファニーズのことば（ことばの大宴会での食べ残し）に対する彼らの軽蔑感を示している。その軽蔑感は，新語，新語義に限らず，ことさらに使われた難解なラテン語にも向けられている。

このように考えてみると，私たちは新語，新語義のマイナス面も認めないわけにはいかないだろう。しかしことばの作り手としてのシェイクスピアのしたたかなところで，それらのことばはマイナス面ばかりを持っているわけではない。

多くの難解なことばは，難解なままで放置されているのではなく，それらを理解させようとする工夫が分かりやすく提示され，この種の軽蔑感が幾分なりとも軽減されている。そのため，『恋の骨折り損』は，新語，新語義の成立条件を考えるのに，格好の作品となろう。

次の引用を手がかりにさらに検討してみよう。

> *Hol.* The deer was, as you know—sanguis—in blood, ripe as the pomewater who now hangeth like a jewel in the ear of caelo, the sky, the welkin, the heaven, and anon falleth like a crab on the face of terra, the soil, the land, the earth.
> *Nath.* Truly, Master Holofernes, the epithets are sweetly varied, like a scholar at the least. (*LLL* 4.2.2-9)
> ホロファニーズ　あの鹿はサンギス，つまり，血気盛りでしたな。大粒のリンゴのように熟し，シェロ，つまり空，天空，蒼穹，天の耳に，宝石のようにぶら下がっているので，たちまち，苦いリンゴのようにテラ，つまり，土，大地，地球のおもてに落下するのです。
> ナサニエル　本当に，ホロファニーズ先生。同義語を見事に使われますね。どう見てもまことの学者です。

ホロファニーズは，学者を気取ってラテン語 'sanguis', 'caelo', 'terra' を用い，それを英語の同義語を使ってそれぞれ説明している。気取った文ではあるが，シェイクスピアが，難解な語を使ったときに，同義語でもって意味の補足をしている好例である。

新語，新語義は，初めて作られた語，初めて使われた語義であるから，本質的に難解である。しかしシェイクスピアは，20世紀のジョイスと違って，これらの語をラテン語と同じように，私たちに理解させる種々の手当，工夫をしている。その一つは，既存の分かりやすい同義語を，一つあるいはそれ以上（2重語，3重語等という）を使って，新語，新語義の難解な意味を補足している。これによって，新語，新語義のプラス・イメージがいくらか生かされるといってよい。

まず，具体例を見てみよう。

> ...dally with my excrement, with my mustachio. (*LLL* 5.1.109)
> わしの外生物，このひげをまさぐる。

'excrement'（外生物）は理解困難な新語義である。したがって私たちの理解を助けるために，その語を補足する 'mustachio' がおかれている。

次の例では，

> ...thou wert immured, restrained, captivated, bound.（*LLL* 3.1.126）
> ...お前は監禁，拘束，逮捕，束縛されていた。

と，最初に新語義 'immured'（「監禁する」）がおかれ，その後，類似した語義を持つ三つの語が続いているので，新語義は無理なく理解される。

新語についても，また三重語以上の補足についても基本的には同じである。

> He is too picked, too spruce, too affected, too odd, as it were, too peregrinate, as I may call it.（*LLL* 5.1.15）
> 彼はあまりにも凝りすぎ，こしらえすぎ，気取りすぎ，風変わりすぎている。
> いわば，漫画家風にすぎる，とでも申しましょう。

新語 'peregrinate'（漫画家風）は，前に置かれた四つの同義語によって，大体の意味は理解されているといえよう。このように，この作品には，奇妙な新語，新語義が多く，それだけにそれらを理解させる工夫が分かりやすく提示されている。

この作品は「ことばの大宴会」の作品であり，シェイクスピアはそこに新しい「ことばの鋳造所を持っている」人物を何人か登場させ，新語，新語義のマイナス・イメージをも限度まで押し進めながら，あらゆることばの可能性を試そうとしたものであろう。面白いことに，新語，新語義は，２重語，３重語によって補われれば，奇異，難解なものといえどもその程度が軽減され，新語，新語義がこれまでに持っていた詩的効果とは別な効果，即ち，笑いと機知の楽しみが生まれることになるだろう。そう考えるなら，シェイクスピアはこれまで種々の詩的特質を持った新語，新語義を作ってきたが，この作品では，それらとは異なった種類の，笑い，機知の楽しさを持った新語，新語義を幾分なりとも作り出したと考えてよかろう。

次に，新語の別な問題，廃語となった新語についても考えてみよう。シェイクスピアの新語には，今日「学習基本単語」（高校程度及び大学教養程度）としてよく使われているものがある反面，一般には使われなくなった語（廃語）も多くある。シェイクスピアの最初期の作品『ヘンリー六世第二部』から，廃語となった新語の９個の例を，作成時の語義で示してみよう。

> abrook, 動詞（耐える，2.4.10）; accuse, 名詞（告発，3.1.160）; boot, 名詞（戦利品，4.1.13）; charneco, 名詞（ワインの一種，2.3.63）; dispurse, 動詞（支払う，3.1.117）; dog's leather（犬の皮，4.2.26）; gnarl, 動詞（唸る，3.1.192）; splitted, 形容詞（ppl. a.）（裂けた，3.2.411）; viliaco, 名詞（悪漢，4.8.48）

この作品には新語が38個あるので，新語に占める廃語の割合は約24％となる。例えば，『恋の骨折り損』『ハムレット』『テンペスト』では，それぞれの新語の数が，119個，118個，46個であり，廃語は，それぞれ24個，22個，10個である。廃語の割合は，それぞれ20％，19％，22％となる（拙著『シェイクスピアの新語，新語義の研究』に，シェイクスピアの新語，新語義の全リストを収録しているが，廃語は備考欄に＋の印を付して示している）。

新語義についていえば，『ヘンリー六世』第二部『恋の骨折り損』『ハムレット』『テンペスト』では，それぞれ138個，330個，373個，154個であり，現在一般的に使用されなくなった語義（廃語義とでもいっておこう）は，それぞれ25個，75個，87個，24個となる。即ち，廃語義の割合は，それぞれ約18%，23%，23%，16%である。

多少のずれはあるが，新語，新語義において，廃語，廃語義がしめる割合は，20%前後といえよう。これは，シェイクスピアの作った語または語義において，5個のうち約1個が，英米においても現在日常的には使われなくなったことを意味している。しかし，これらは作品のなかでは生きているので，将来日常的に使われるかもしれない。

語の運命は数奇なものである。'bedroom' や 'mountaineer' のように，作成時とは異なった意味で今日も使われているものもあれば，このように廃語，廃語義になったものもある。かと思うと，*OED* 初版では取り上げられなかったが，同旧補遺，新補遺あるいは *OED* 第二版で取り上げられるようになった，換言すれば，19世紀，20世紀になってようやく評価されるようになったシェイクスピアの新語，新語義もある。

このような意味の新語，新語義について考えてみたいが，先ず新語について考えてみよう。今日，大抵の辞書に収録され，またよく使われている 'black man'（黒人）は，独立した見出し語として *OED* 初版には収録されていなかったが，旧補遺で初めて，独立した見出し語となった。この語は，

> Black men are pearls in beauteous ladies' eyes.（*TGV* 5. 2. 12）
> 浅黒い男は，美しい女の目には真珠とうつる。

と，「浅黒い男」という意味をもっていたが，19世紀以降「黒人」という意味で使われるようになったため，この語が必要となってきたものと思われる。

次の例，

> These blue-veined violets whereon we lean（*VEN* 125）
> 私たちがもたれ掛かる青い脈をした菫草。

では，'blue-veined'（青い脈をした）が，今日，'blue-veined cheese'（略して bluecheese 青かびチーズ）として使われるようになった。今日私たち日本人の嗜好を多様化し，青かびチーズも私たちの食卓に出るようになったが，このことばが，20世紀において評価されるようになったシェイクスピアの新語である。

20世紀において心理学で使われるようになった新語もある。

> . . . to be tender-minded
> Does not become a sword,（*LR* 5. 3. 31）
> 　　やさしい心は
> 剣を持つものには似つかわしくない。

20世紀において，W. ジェイムズ（William James 米国の心理学者，1842-1910）は，二つの型の心的傾向を考え，'tough-minded'（行動主義的，扇情主義的，厭世的心的傾向）の反対概念として，

シェイクスピアの 'tender-minded'（原理主義的，楽天主義的心的傾向）を設定したため，この語は今日でも使われるようになった。*OED* には収録されていないが，更に新しい用例として，ノーベル賞受賞詩人シェイマス・ヒーニー（Seamus Heaney 1939-）は，彼の評論集『ことばを慎む』（*The Government of the Tongue* フェイバー・アンド・フェイバー社，1988年，57頁）の中で，ポーランドの詩人ズビニエフ・ヘルベルト（Zbigniew Herbert 1924-）に潜む二つの対立する心的傾向を説明するために，これらの語を並列して使っている（'the tender-minded and the tough-minded'）。

次のような例もある。

> Falstaff, that old white-bearded Satan.（1H4 2.4.509）
> あの白ひげの老悪魔ともいえるフォールスタッフ

人間を修飾するものとして，'white-bearded'（白ひげの）が使われていたが，今日 'the white-bearded wheat'（芒（のぎ）が白くなった麦）として，主に使われるようになった。

今日において評価されたものとして他に，'after-time'（未来，子孫）（*2H4* 4.2.52），'good thing'（よい思いつき，あるいは 'too much of a good thing'（ありがた迷惑，*AYL* 4.1.123）），'Rialto'（ヴェニスのリアルト橋，広く言って，商業中心区域，*MV* 1.3.108）がある。

新語義として，今日において評価されるようになったものもある。

まず，性的意味を持つ語は，*OED* 初版では取り上げられなかったが，新補遺及び第二版で収録されるようになった。具体例をあげてみよう。

> ... your daughter and the Moor are now making the beast with two backs.（*OTH* 1.1.117）
> お嬢さんとムーアが，背中が二つで身一つの怪獣になっています。

この 'beast'（二つの背中を持った一匹の怪獣）は，「性行為をしている男女」の意味で，今日使われるている。

他に性的意味を持つ語としては次の例がある。

> Was ever woman in this humour wooed?
> Was ever woman in this humour won?
> I'll have her, but I will not keep her long.（*R3* 1.2.230）
> 女がこのように口説かれたことがあるのか。
> 女がこのように口説き落とされたことがあるのか。
> あの女をものにしよう，しかし長くはごめんだ。

> ... this driveling love is like a great natural, that runs lolling up and down to hide his bauble in a hole.（*ROM* 2.4.94）
> この愚かな恋というものは，穴さえあれば抜き身の道化棒を差し込もうという道化に似ている。

'have'は，「女を（性的に）ものにする」の意味を持ち，'hole'は，女性の性器の意味を持ち，今日スラングとしてよく使われている。

他に，‘stalk’（男性の性器）（*LC* 147），‘tumble’（女と寝る）（*HAM* 4. 5. 62），‘way’（惚れている）（*MM* 3. 2. 130）がある。

このような性的意味を持つ語が新補遺および第二版に収録されるようになったのは，20世紀において人々の性に対する考えの変化が，これらの語の評価に結びついたものと思われる。このように，シェイクスピアの新語，新語義は，作られたときから，今日まで生き続けてきたものがあったり，廃語あるいは廃語義となったり，あるいは逆に，今世紀にはいって評価されたりしている。このように，人の運命に劣らず，語の運命は数奇なものである。